

やみち

....被災地支援情報....

第87号 発行日 2007.03.12
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel : 078-574-0701 fax : 078-574-0702
URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
e-mail ngo@pure.ne.jp
口座番号 : 01180-6-68556 (郵便振替)

阪神・淡路大震災 12年目の「1.17」



1.17KOBEに灯りをinながた

絆=KIZUNAを世界語に！

ここ数年、1月17日を迎えると「風化」という二文字が目につくのは気のせいでしょうか？ 阪神・淡路大震災から10年目を迎えた2005年の1月17日は、いつものように当センターの庭に集まった仲間の前で、「これまでには、ひたすら走ってきましたが、これからは一日一日をゆっくりとしっかり歩んで行きます」と誓い、12年目を迎えた今年は、さらにつけ加えるように、「一つひとつの『生』と『死』にできるだけ向き合いながら、一日一日をゆっくり、しっかり歩いて行こう」と誓いました。12年前、映画監督のビートたけしさんがある週刊誌で、「現場も見ないで、震災で亡くなった方のことを約5,000人とかいう人がいるが、とんでもない。それぞれの生と死があつたんだ！」と怒っていたことを思い出します。決して「震災」を一括りにして捉えてはいけないです。

さて、阪神・淡路大震災の時にいち早く被災地に入り私たちボランティアをサポートしてくれたある財団のKさんは、2年前の新潟中越地震以後再々現地に入って、”絆”

Tシャツを作られました。そのTシャツに出会って以来、この”絆”という文字が大変気に入り、最近よく使っていますが、”絆”は、ほんとに独特の響きを醸し出しています。復興というのは、単純に絆を取り戻すことかも知れません。しかも絆=絆ちがたい関係というのは、公共性のなかで生まれるもので、私のなかにあるものではありません。

一方、公共性については、02年国際ボランティア学会編集発行の「ボランティア研究VOL2」で、佐藤慶幸氏が「公共性とは、各個人が各自の社会生活をとおしてく私>のうちに蓄えたものを、一定のルールにもとづく他者との相互作用関係のなかで、言説と行為として表出するところの公開的な社会空間を言う」（同誌6P）と説明しています。つまり自発的に私的領域を開くということは、震災で一度は壊れかけた絆が、また紡ぎなおされるように、人々のなかに「ボランティア精神」、つまり自発性があるからではないでしょうか？

12年前、ボランティア元年と言われ、一年間で延べ138万人のボランティアが被災地に駆けつけて来ましたが、ボランティアの1ページを担ったのは、生き残った隣近所の人たちであったことを忘れてはなりません。あの時、誰から言わされたわけでもなく、それこそ自発的に要救助者35,000人の内、27,000人を助け出したのは隣近所の人たちでした。この時のボランティア精神は、いのちをつなぐ絆だったのだと思います。

”たかがボランティア、されどボランティア”かも知れないが、確実にボランティアは社会を変える。

代表 村井雅清



第2回 コミュニティと食～団地再生への取り組み～ 入江一恵さん(NPOひまわり会=ふれあい食事処・明舞ひまわり)

私が現在やっております“食を通した福祉コミュニティづくり”を目指してひまわり会を立ち上げるに至ったきっかけは、知人に声をかけられ、1ヶ月考え、迷って迷ったあげく決断し引き受けましたが、はじめは本当に自信がなく、一切見当がつかなかったのです。そのときに、私がこれまで一緒に活動してきた仲間たちにじつは檄を飛ばしたのです。それは「73才にして立ち上げるので自信があるわけない、しかし、私はこれを最後の仕事にしたい」という意味の手紙を出し、一週間のうちに本当にたくさん返事が、カンパとエールとともに返っていました。私もこれには感動しました。

私は昔から「食べる」ということに、何か哲学を持たなくてはいけないと考え、お年寄りたちが昔からやっている「食に対する術」というものを伝承しなくてはいけないと思っていた。これは「技」であり、「生活の智恵」なのです。そして、食をとおした福祉コミュニティづくりというのは、ふれあい食事処と減農薬・無農薬・有機野菜の提供、配食と見守り活動、そして人ととのふれあいの中で情報発信や食の交流・食教育ということまで考えております。

従って、一般的にはすぐ栄養のバランスが一番はじめにきて、それから安心・安全がきます。私はこの二つとも非常に大事だと思うのですが、あえて「旬を取り戻す」「季節を取り戻す」「昔の家庭の味を取り戻す」そして「おいしさの問題」を考えています。食べるものは「おいしいものでなければだめだ」というのが私の信条です。例えば、腎臓病食・人工透析食という病人食を作

第3回 いのちの秩序 農のかへ震災から学んだこと 本野一郎さん(兵庫六甲営農経済事業部専門管理職)

あの日95年1月17日、私は西区に住んでおりましたから、揺れたことは揺れたんですが、ほとんど周辺含めて被害が少なかった地帯で、救援の側にまわりました。次第に神戸市内の様子がはっきりするにつれ、これは水と食糧が必要になるというふうに判断をして、朝の8時30分頃に最初にやった仕事は、米の倉庫の扉を開け、おにぎりを一生懸命にぎり3週間くらい作りました。1日6千個～7千個くらいにぎりました。それらはほとんど農村からきたおにぎりです。そのことを僕は絶えず言い続けないと、おにぎりがどこからきたかという考える余裕がないですし、その話を聞いたときに「あっあのときそうやったんか」ということを知ってもらえることが大事なのです。翌年から1月17日前後には米蔵記念日という催しを作りました。

最近、食農教育や食育教育とか、食育基本法までつくって政府が食の乱れについて国民に注意するたいそうな国民運動がはじまったわけですが、どうも栄養学的な話が非常に多くの語られるのです。しかし、私たちが言いたいことは食が乱れている、食がないがしろにされているということです。その基本は「命の源」である「農」が忘れられ、「農」を知らない、「命」を生み出す現場に触れることができないというこの構造自体が問題で、「農」を大切する気持ちが失われている、つまり「命」を生み出す、「命」を支える食べ物に辿り着くことができていない、われわれの生活様式、考え方、発想、都市都市文明、そういうものが実は「命」を大事にしない仕組み・社会・考え方を生み出してしまっているのではないでしょうか。

種の自給率は、28%特に野菜の種に至っては、10%しか日本

市民寄付講座「寺子屋バオ」報告

第1回の報告は前号に掲載しております。

るのに栄養のバランスを考えても、それがまずくて食べられないものであれば、その人たちは食べてくれないので。いかに薄味なら薄味でも食べられるものを作るという心遣いや智恵が必要なのです。本当の味がするものを追求し、選んで、実際に食の広場ひまわりの食事の中に入れていくと考えたのです。

中国の食思想のなかに“身土不二”という言葉があります。何もスローフード運動が、イタリアから日本に渡ってきたといって騒ぐ必要はないのです。日本には中国からのこの“身土不二”という「その土地で摂れたものは、その土地の人が食べるのが一番良い」という思想が根付いたのです。“薬食一如”や“一物全体”などといって、鰯は全部頭から丸ごと、お米は全部玄米から皮ごと食べればいいのだなどの意味です。その考え方が一番理にかなっていて、こういうスローフードの考え方方が、日本にも中国から影響を受けて昔からあったのです。

また、今後の課題の一つとして、独居老人や高齢者夫婦の家庭や糖尿病などのリスクを抱えた高齢者の方への食事サービスの多様なニーズへの対応です。いま腎臓と心臓が悪くて入退院を繰り返している方が近くにいたり、認知症のご夫婦がいらっしゃいます。そういう方たちに細かい心遣いをしたいと考えています。

認知症の方などは、毎日毎日通っているのに、同じことを繰り返します。多様なニーズへ対応するというのは大変なのですから、わたしどものような小さな事業をやっているNPOだからこそ、できるのではないかと思っています。

環境 eco life ～いのち・食・自然を育む～

の国で作ってないです。また最近は種の問題が非常に注目され、9年前に遺伝子組換大豆が日本に上陸し、1997年に世界中で特にヨーロッパと日本で激しくアメリカの遺伝子組換大豆について拒否反応があって、表示義務制を要求したのです。しかし、政府は我々の遺伝子組換の表示義務要求をのんだのですが、最後細胞が解けて見えない食品には判定のしようがないから、表示しなくていいと決めたのです。これはものすごい抜け穴で、結局納豆や豆腐・そういうものしか表示しなくていいのです。結果、油はしなくていいのです。しかも遺伝子組換の危険性について語る学者は一人もいません。あっという間に7～8年で遺伝子組換が広がって、しかも日本の大豆の自給率5%なのです。大部分はアメリカに頼っているのです。いま80～90%が遺伝子組換の大豆です。その大豆を作っているのはモンサントという会社で、もともと除草剤の会社なのです。そこが考えたのは、遺伝子組換によって、その除草剤が効かない大豆を作り出したのです。一斉に飛行機が薬を蒔くと、雑草は枯れても、大豆だけは生き残るという凄い種なのです。そのモンサント社はいわく・因縁つきの会社でベトナム戦争で敵地ジャングルに除草剤を飛行機から蒔き森が枯れ、森の住民が薬剤を浴び、その結果として体が弊った子どもが生まれる、それを切り離すために日本までやってくる。こういうことを目の当たりに見たわけですが、その除草剤の中に発ガン性物質ダイオキシンが含まれていたということが後になってわかったわけです。そういうことで儲けた富でラウンドアップレディという除草剤を作り一世を風靡し、日本の百姓をやっている人は知らない人はいないくらいすごいのです。我々には「命」と「お金」をどう考えるかという問題があって、自然観が問われているわけです。

第4回 著らしの環境とまちづくり～被災地の体験を生かす取り組み～

松本 誠さん(武庫川流域委員会委員長・市民まちづくり研究所所長)

私は震災の時は神戸新聞社におり、90年に作った情報化科学研究所という、新聞社が全国で唯一作った地域政策を研究するシンクタンクをやってました。それが本格的に活動を始めると同時に震災に遭い、当初から震災復興の民間版の復興計画づくりの事務局を引き受けたいという想いから、その後は様々な市民活動団体・研究者、専門家、NGO・NPOとの協働での研究活動、復興政策づくりでの検証あるいは出版、コーディネートなどをやってきました。現在は市民まちづくり研究所で地域のまちづくりのサポート・コーディネートする仕事をしています。武庫川流域委員会というのはその一環であります。私は川づくりで直接地域と関わって10年になります。2004年3月に武庫川流域委員会が県の諮問機関として発足し委員長になりました。

今日のテーマは、「被災地体験を生かす兵庫の試み」、なぜ武庫川流域委員会の提言や活動は被災地体験を生かした試みなのかというところはあまり武庫川流域委員会では言っていません。ただ、具体的な議論の中ではしおり「あなた達は震災から何を学んで来たのか」と、県の職員、学者、委員のメンバー、住民にはよく言ってきました。その裏側にはやはり震災体験・復興体験に関わった体験がなければもう少し違う展開になったかもわからない、と私自身やはりこの震災体験を生かすんだということであつただろと思います。今日は、武庫川流域委員会の提言活動とは一体何を意味しているのかという話をしたいと思います。

武庫川というのは西宮・尼崎を流れ、宝塚を越えたら急に狭くなり、武田尾温泉から武庫川渓谷へと、それから、三田、篠山と、篠山を源流として本流だけで65キロからなる2級河川です。

特別版『創造的地方自治と地域再生』について学ぶ

池田 清さん(下関市立大学経済学部教授)

こんにちわ初めてまして池田清といいます。どうぞよろしくお願ひいたします。私のレジュメでタイトルが「創造的地方自治と地域再生への招待」ということで1時間のご招待をさせて頂きます。

この本を単刀直入にいうと創造と伝統的の視点から都市と地方自治を考えてみたものであります。なぜ創造的地方自治、「創造」というものを問題にしているかというと、いま企業経営でも創造性が重要だと、あるいはものづくり、あるいはデザインとかあるいは研究開発でも創造性が重要だと、それはグローバリゼーションの中で従来型の大量生産システムではたぶん少なくともヨーロッパ、日本などの先進諸国は、低コストのなかで競争力が落ちるということもあって、企業的には新しいものを開発するということで創造性が重要だと、それは生産・もの作り、企業だけではなくて、私はその企業をも包む、地域だと都市というものの全体が創造的な空間というか、ものでなければならない、つまり企業だけが断絶して創造性と言っても、そこからは創造性は生まれないのではないかと、つまり地域というのは学校があり、多くの人々の暮らしがあり、さまざまな営み・交流というものがある。当然自治体もそうですね。そういう創造性が求められているところで、真の創造性は本当の意味の伝統をふまないと創造性というものが出てこないのではないかというのが私はこの本で言いたかったことでありまして、伝統というのは似非(えせ)伝統という、真の伝統というのは裏には似非(えせ)伝統というのがあるのです。また、この本で言ったのは私のつくった言葉で棄民国家、つまり国家というのが歴史を見れば、多くの民を棄民してきた歴史がある、

川の大半を県知事が管理者として行っているのが河川行政であります。河川行政は、川が雨で氾濫し洪水を起こさないようにするというのが明治以来の治水事業でした。

しかし、近年の集中豪雨などにより、河川改修やダムだけでは十分対応できない水害が都市部で発生。河川法改正による河川環境の整備と保全、地域住民の意見を反映した河川計画制度の導入することになりました。従っていろんな意見を合意形成でまとめて、総合的な治水対策の検討を進めて、ゼロベースからの河川整備基本方針への策定、のために合意形成の場である武庫川流域委員会を作り、そこではそういう参画と協同の理念に基づいて責任ある立場から議論を期待すると言っています。提言の特徴には3つの方針として①総合治水へ全面的に取り組む②基本方針から審議し、提言する③「参画・協働」を推進するために、徹底的な合意形成を目指しています。そして4つの展開として①流域対策を全面的に展開する②利水専用ダムなどの既存ダムを治水に活用する③まちづくりの視点を生かし、危機管理の具体策を提言する④流域連携の川づくりへの具体策を提言するというものがあります。そのあたりからこの8月に提言をまとめて県に提出しました。私たちは12年前に震災から学んだのです。地震は止められない必ず地震は起きると、しかし、家がつぶれて死なないように、下敷きになって死なないようにしましょうということです。これが防災から減災へと被害を減らすということです。したがって、それと同じ発想なのです。河川行政も防災、水害を防ぎ減災する、水害は起きるものだからしょうがないという前提で対応すべきだということを大きな柱として盛り込んだのがこの提言なのです。これが総合治水です。

そういう歴史を持つ棄民国家から、私の提唱する創造的地方自治というものを我々民衆が作りあげなければ、たぶん棄民国家によって、我々は捨てられるのではないかということです。

では創造的地方自治というのは、どういうことかということですが、私は沖縄へ行つていろいろ調べましたら、沖縄には「命こそ宝」というような琉歌(名詞)がある命こそ宝というものは生命こそ宝ということです。この「命こそ宝」というのは沖縄の沖縄戦を戦った住民丸ごとですね、多くの犠牲があったあるいは戦後の米軍基地があった。そういうことで「命こそ宝」という思想が生まれたのではないかというのがだいたいみんなが言っている、「命こそ宝」の思想の捉え方なのですが、私はそれだけではないのではないかと、沖縄の持っている縄文時代からの縄文的な社会という、これはこの私の本の確信でもあるのですが、そういうものの「ゆいまーるの精神」、「結いの精神」というか、そういうものが連続として沖縄の地域の中で生きづいていて、それが沖縄戦と多くの犠牲と戦後の米軍基地のなかで、そういう「命こそ宝」という沖縄の地域のなかのいきづいてきた歴史のなかから生まれた思想ではないのかというふうにとらえ返した訳です。そういうことを創造的地方自治というのは確信としています。」



特別版 NGOに生きた僧侶『有馬実成を語る』

大菅 俊幸さん(シャンティ国際ボランティア会)

私自身も自己紹介かねて少しお話します。シャンティ国際ボランティア会（以下SVA）に入ったのは、95年でやっぱり阪神・淡路大震災の時です。1月には某出版社に務めていたのですが、いろいろ自分自身に限界を感じていました。そんな95年1月にあの地震がおきて、毎日のようにテレビで流れ、ボランティアの人たちが駆けつけているのを目の当たりにして、行きたいと思っていました。それでどうしたらいいかわからないので、NGO・ボランティア関係の冊子があり、どこがいいかと思って、探したときに曹洞宗国際ボランティア会（現：SVA）がありました。私も駒沢大学出身で、昔はお坊さんとは縁があったものですから、ここだったら、仏教的な考え方をバックボーンにしているのではないかと思って、電話をしました。そこで有馬さんと出会い、今日まで至っています。

NGOとかボランティアを考えるときに西洋や、欧米からきたものだというお話などがありますが、日本の仏教史の中に、それに相当するようなすごいことやった人たちがいます。あるいは、それに目をつけてSVAを動かし、そこから学んでやっていこうとしていた有馬さんの行動がむしろ亡くなつてから、いますぐ感じています。

そもそも出発が、1979年のカンボジアの難民が発生したときです。世界各地で連日のようにニュースでやっていて、その時に曹洞宗としても何かしなくてはということで調査団を派遣しました。一番最初に立ち上ったのは、JSRCという曹洞宗のプロジェクトでした。曹洞宗東南アジア難民救済会議というグループで1年間活動しました。その後、有馬さんたちが引き継ぎ、現在の前進であ

る曹洞宗ボランティア会という団体を立ち上げたのです。内容は、絵本活動、図書館活動を中心に重きにおいて今までやってきています。

NGOを動かすときのヒントとして有馬さんは重源さんという人を熱い目で見ていました。どんな人だったかというと、東大寺が鎌倉時代に源平の戦いで焼き討ちに遭い、それを再建せよとお上から勅命が下り、白羽の矢が当たったのが重源さんで、13歳の時、京都にある真言宗の醍醐寺で出家して若くしてお坊さんになった人です。もともと山野を駆けめぐって仏法を説いて募金活動をやっていた人なのですが、歴史の表舞台に登場するのが東大寺の大仏を復興するようになってからです。重源さんは新別所を作りもとと新たにそこを進化させました。それは東大寺の建設のために別所を方々につくり、今までの別所の意味合いばかりでなく、木材を切り出す方法を教えるいわば職業訓練センター的なもの、岩風呂を作り慰労施設にしたり、今までいう土木事務所といわれる飯場でもあり、中央からの出先機関など総合的な役割を持つ機関として位置づけ、重源さんは7ヶ所作ったのです。そういうことをしながら、20数年かけ復興に取り組んだのです。そして有馬さんも重源さんのような行動をSVAの活動のなかで、やろうとしていたと思います。そのような別所みたいな有り様を現在どのように作れるか、各地に拠点を置きながら人材育成・資金調達・ターミナル機関などを作りながら、当時の鎌倉時代では凄いと思っていたと思います。ボランティアとかNGOというのは向こうから来たものではなく、仏教の中にそういう人たちがいたじゃないかと、そこから学んで行こうというところにあるのではないかと思います。

寺子屋について

今年度から、1年お休みをしていた「寺子屋 パオ」を、また復活させました。なぜ復活させたのかということを説明しておきたいのですが、そのためには、なぜお休みしていたのかということを説明しなければなりません。お休みの理由は極めて簡単です。兵庫県のNPO支援策の中で、これまでこうした「講座」「研修」ものに助成金がでていたのが出なくなったからです。しかし、そこで「？」と思った。「寺子屋って、お金がなければできないものか？」と考えたのです。その結果財源のある範囲でやろうということになりました。そこで財源確保の一つとして寺子屋で行う勉強会を「寄付講座」とし、世論に呼びかけて寄付を集めることにしました。有り難いことで、わずかながら賛同してくれる人が現れました。しかし、残念ながらその寄付だけでは講師料も捻出できないので自己資金をプラスして開催することにしました。

さて2000年から始めた当センターでの寺子屋には、常連さんと言われるほどのファンも育ち始めました。何故、そうして寺子屋に来て下さるのか？それはテーマに関心があり、食事にも満足しておりという理由もあるだろうが、おそらくこの場で、知らない人と出会い、知らないことに出会い、自分が変わることにある種の「心地よさ」を感じるからではないでしょうかと合点しました。逆に、ともすれば私たちの日常は、いつも同じ人と顔をつきあわせ、同じ仕事をこなし、結局疲れ果てて家に帰って寝るだけという日々を送っているのではないでしょうか？そうした暮らしには、変化がなく、新しい気づきもなく、「生きがい」を感じる機会も少ないのかもしれません。つまり日常の暮らしの中で「元気がでない」のです。それなら、職場や学校以外のところででも「元気の出る」ところがあればどうだろう？と思うようになりました。当センターの寺子屋に来ることによって「元気」になって貰えれば嬉しいのだが、さて?????

文責 村井 雅清

【てらこや募金にご協力下さい】

「寺子屋事業」を展開するにあたり、「市民寄付講座」として開催する講座に賛同して下さる市民のみなさまから寄付を募りたいと思います。直接講座に参加できなくても寄付という行為で市民一人ひとりが主体的に参加できるように「市民寄付講座」として、「てらこや募金」（一口500円）を募りたいと考えました。みなさまにこのような講座を支えて頂き、たった一人の命を大切にしながら、「安心で、安全な社会をつくる」一助になればと思います。

その集まった募金の中から、講師への謝礼を含む運営費に充てていきます。また同時に参加者にも参加費として2,500円を頂き、講話を含めた当日の運営費に充当いたします。講座は、基本的に当センターの会議室で行い1時間ほど講師の方から講話を聞き、飲食を含めて議論や交流を深めて行きます。ただし、講師によっては講座のあり方も多少異なります。

ぞう 通信。

第39号 2007.3.12

発行所：被災地NGO協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel: 078-511-8698 fax: 078-574-0702 http://www.pure.ne.jp/~ngo/

いつもあなたの

そばにいます ...

新年明けて初のぞう通信となります。季節は春へと移り変わり、温かい日が続いていますが、みなさんがお過ごしでしょうか？今年もどうぞよろしくお願ひいたします。

震災から12年を迎え、節目の年を迎えました。今年も事務所にある観音様の前で県外から来た仲間たちとともに祈りを捧げました。毎年1.17を迎えるといつものことですが、これまでの歩みを振り返ります。本当に多くの人たちに支えられここまで来たんだなあと・・・また改めて感じています。

06年(平成18年)12月31日(日曜日) 言葉 番号 番号

阪神大震災の被災地からの支援

阪神大震災の被災地からの支援の中で、生まれたゾウの手巻きタオル「まけないぞう」が1月から、新潟県中越地震の被災地でも販売される。被災者支援を続ける被災者のNGOから贈られた新潟の被災者が、「復興に向かってぜひ自分たちも作りたい」と声を上げた。阪神大震災で自宅を失ったお年寄りたちが、立ち直ろうと假設住宅などで受けた試みは、新潟の被災地の盛んなものとなりそうだ。

まけないぞうは、神戸市立湯田小学校の生徒さんからたくさんのタオルを頂きましたのでお送りいたします。

「まけないぞう」新潟へリレー

中越地震被災者に製作指導へ

阪神大震災の被災者が作ってきた「まけないぞう」、新潟県中越地震の復興にもつながりそうだ（右は村上さん、神戸市兵庫区で）

(2006/12/31付け読売新聞)

雪にも大雪にも

「もへまけねえぞう！」作りin種苧原

新年を迎え、それでもあまり雪の多くないこの1月のはじめはとてもいい陽気に包まれている。

1月5日、旧山古志村、種苧原地区。ここは山古志村の中でも雪が多く積もる地域だと言われているが、今年のはじめは他の地域と同様、雪が少なく穏やかな気候だ。

「毎年これくらいだつたらいいんだけどね。」種苧原地区で生活雑貨店を営む樺沢恵子さんはつぶやく。昨年の12月に、KOBEから「被災地NGO協働センター」の代表である村井雅清さんと、東京に本部を置く「全日本佛教婦人連盟」の理事の方々がここ山古志を訪問された。その際に携えていたのが、「まけないぞう」だ。

この「まけないぞう」は、1995年の阪神淡路大震災後、KOBEの被災地・仮設住宅で1997年に「生きがい仕事づくり事業」の一環として生まれたタオルで出来たグッズだ。このまけないぞうは全国から寄せられるタオルを用いて、一本のタオルでぞうさんの顔をあしらった壁掛けタオルへと変身し、それが全国へとまた発信されてきた。

まけないぞうのビナマからの

メッセージ

前略いつもありがとうございます。
福山市立湯田小学校の生徒さんからたくさんのタオルを頂きましたのでお送りいたします。
“ぞうさん”に皆ははげまされています。
ありがとうございます。

広島県の方より



水没した民家 (2007年1月山古志村)

このタオルのやり取りを通じて全国の方々と被災地とを結ぶツールとなり、またこのまけないぞう自身がメッセージを携えて、また全国の支援者へと届けられることにより、心の交流がKOBEの被災地では育まれてきた。

「全日本佛教婦人連盟」もまた、この「一本のタオル運動」の支援者でもあり、全国にタオルを呼びかけて被災地KOBEへと送り、そのタオルが「まけないぞう」へと変身してまた全国へと発信される、その応援を地震から10年間、続けてきた団体でもある。

その訪問の際に、長岡市社会福祉協議会山古志支所の草間さんから紹介いただいたて、この種苧原地区の樺沢さんの経営する「中道屋」さんにも訪れた。樺沢さんは仮設から昨年の5月に戻ってきたという。

「仮設は狭くて、何かしてないと落ち着かなくて。それで結局バッチャワークとかクラフトづくりをずっとしてたんだて。」一人暮らしのため、仮設は4畳半という一人暮らし用という狭い部屋の中でクラフトづくりを続けてきたという。

そこで携えだまけないぞうを渡すと、「これ、いいね。こんなのが作れたら楽しいね。」という言葉が返ってきた。この樺沢さんの一言から、今回の種苧原でのまけないぞうづくりが実現することになった。

1月5日。山古志の中でも雪が一番多いとされる種苧原も路肩に雪が残っている程度。屋根にはうっすら雪が被っているほどだ。

中道屋さんに集まつたのは、4人のお母さん。それぞれ仮設から昨年の6月~11月に戻ってきた方々ばかりだ。

「やっぱり家がいい。仮設だと落ち着かなくてね。ここにいるのが一番だよ。」自然と笑顔がこぼれる。

この日、まけないぞう作りのため、KOBEから被災地NGO協働センターのスタッフであり、この10年来まけないぞう事業を担当している増島智子さんも駆けつけてくれた。

「これまで阪神淡路大震災から仮設で始まつたまけないぞうがこうして山古志に来ることが出来て、本当に嬉しいです。」



自己紹介が始まり、まけないぞう作りのスタート。このまけないぞうはタオル一本で出来てしまう。お母さん達の針がどんどん進んでいく。

「うまいですね、皆さん」「こればっかりしてたつけね。ここに掛かっているバッチャワークも仮設に居る時にずっと作ってたから。針仕事してる時が一番落ち着くんだて。」「仮設に居る時は、逆に全然針仕事が出来なかつた。なんとか落ち着かなくて。こっちに帰ってきてから、ようやく針を持つようになった。この人は仮設でもせつせと針仕事して、関心してたんだて」

仮設での暮らしから地元に戻って、ようやく一息をつく、そんな心境だという。

そうこうしているうちに、まけないぞうが出来上がってきた。針は順調に進む。出来上がってまけないぞうを覗きながら、笑顔がこぼれる。

「これだと、あんまり余計なゴミも出なくて、タオル一枚で出来るからいいね。」

「なんだか、この顔、私に似てるみたい」

「その顔いいじゃない。私なんか、こんなにほっこりしちゃつて。」

「神戸でも作り手さん達が自分のまけないぞうを見て、やっぱり顔が似てくるねって言ってますよ」

出来上がってまけないぞうを手に、品評会が始まること。どの顔もそれぞれの特徴が出て、いい顔をしている。

「こうやって出来ると、やっぱりいいもんだね。」まけないぞうの頭にはリボンがあしらわれる。しかし、これだと神戸で作ったものなのか、山古志で作られたものなのか分からなくなってしまう。そのことを相談すると…。

「やっぱり山古志で作ってるんだから、頭には闘牛の面綱（おもづな）がいいんじゃない？」



神戸と山古志、つなぐゾウ

阪神淡路大震災で、被災者の自立支援のため考案されたゾウの形をした手作りタオル人形「まけないぞう」が、新潟県中越地震で被災地となった長岡市（旧山古志村）にも広まっている。

「まけないぞう」は昨年12月、神戸のNGOから、旧山古志村の被災者に贈られ

た。仮設住宅から地元に戻った樺沢恵子さんが「雪に閉ざされる冬場、何かやっていない」と作り方を習うことになった。5日は神戸の「被災地NGO協働センター」の増島智子さんが指導に訪れ、樺沢さんら4人がチャレンジ。人形の頭には、山古志の象徴である闘牛の飾りを付けた=写真、安富良弘撮影。「これで『地震にも雪にも負けねえぞう』です」

山古志村でのまけないぞう作り
(2007/1/6付け朝日新聞)

「そしたら牛もタオルで作れないかしら？」などなど、次々とアイデアが飛び出してきた。すると、一人のお母さんが、「私の家に本物の面綱があるから、それ持ってくるわ。」と中道屋さんを飛び出して、家から闘牛の面綱を持ってきてくれた。「この面綱が頭につけると面白いかもね」

そして、樺沢さんが自分の裁縫箱から黒と赤と白の紐を取り出した。それらをねじり合わせて、面綱の完成。頭につけると、どこかお祭りっぽく、愛嬌がある。「このまけないぞうっていう名前、いいね。これに頭に面綱をつけたら『も~まけねえぞう』になるね」とあるお母さん。



地震、豪雪と苦境を乗り越えてきた方々が、実感を込めてそうおっしゃった。

「地震にも、大雪にも、『も~まけねえぞう』。本当にも~負けねえね。」こうしてKOBEで始まつたまけないぞうが、今度は山古志へとつながった。この広がりがまた一つ心の復興の一つの支えになれば、まけないぞうも本望ではないだろうか。

被災地から被災地へ。多くを語らずとも、この「まけないぞう」が心をつなげてくれる、そしてまけないぞうが山古志から発信されることがこれからこの地域のお母さんの励みになることを願つてやまない。

文責 中越復興市民会議 鈴木隆太

～糸～ グッズ販売中

山古志版まけないぞう 1個400円（上記掲載）

お問い合わせ：中越復興市民会議
〒970-0087新潟県長岡市千手1-9-1
TEL0258-30-3460 FAX0258-30-3560